



Good News for Japan

ウィリアム・ブースの視線の先は…

石川 一由紀

平成二十六年七月一日 発行
昭和二十二年一月二十四日 (第三種郵便物認可)

明治二十八年 創刊 毎月一日・十五日発行

救世軍の誕生は、今から百四十九年前の一八六五年にさかのぼります。今日はご一緒にその発祥地東ロンドンを訪れてみましょう。

ロンドン地下鉄および都市近郊電車ホワイトチャペル駅からほど近い、マイルエンド通りのブース・メモリアル (記念碑) バス停前。救世軍創立者、ウィリアム・ブースが、天を見つめ、天を指さしてハレルヤ (神をほめたたえよ) の意と、救世軍式の敬礼をする全身像が立っています。

す。この地域には、多くのバン格拉デシユ系の住民が住み、行き交う人々も、立ち並ぶ屋台も異国情緒豊かで、ロンドン最大のモスクもあります。

救世軍が始まった当時、この町には貧困にあえぎ、生きる目的を見失い、罪悪に身を落としていく人々の惨状がありました。ウィリアム・ブースは、当初数週間滞在する予定で入ったこの町において、このような惨状にある人々の救いこそが、神から与えられた使命と感じたのです。

現在でも、ウィリアム・ブースが初めて大衆に神の愛を語りかけたパブ (居酒屋) 前の広い歩道、救世軍の最初の本部となった建物、天幕 (テント) 伝道集会の場



創立者ウィリアム・ブースの立像

所などが、近くに点在しています。

ブースの立像の近くにある弁護士事務所 (建物の壁には、ここマイルエンドに開いた大きな壁画があります。ロンドンオリンピックにあわせ、この事務所が描かれたもので、エリザベス女王、エレファント・マン、この事務所の創業者、有名無名の人々や建物が描かれています (左下の写真)。

最前列に描かれた三人をご紹介します。右は一番大きく描かれた劇作家、『ピグマリオン (映画『マイ・フェア・レディ』の原作)』、『救世軍バーバラ少佐』などの作品を描いたバーナード・ショーです。両手を顔の前に置いて、まぶしい光を遮るようにしています。

左は英国海軍士官・海図作成者・探検家である通称キヤプテン・クック。絵の枠からはみ出すほどの望遠鏡を手にして遠くを見つめています。真ん中はウィリアム・ブースです。救世軍の制服、制帽に身を包み、開いた聖

謹んで震災のお見舞いを申し上げます。
一日も早い被災者の方々の心の平安の回復と、被災地の復興をお祈り申し上げます。

書を手に持って何か語っているようです。

壁画の作者の意図はわかりませんが、私にはこの三人が、ロンドン中心街から、人間・芸術・社会構造、科学技術や探求心、望遠鏡、キリストによる罪の救済と神の愛、聖書、という三つの異なる立場で、未来を見ているように思えてなりません。

ウィリアム・ブースの視点は、救い主イエス・キリストの視点そのもので、

「イエスは、

……また、群衆が飼いの羊のようになり弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」(マタイによる福音書 9 章 36 節)

とあるとおりです。

ここで始まった救世軍の働きは、現在百二十六の国と地域に

まで広がっています。そして、神の愛に動機づけられ、救世軍の拠点のない地域でも、人道支援、医療、社会福祉を通して、人々のニーズに答えているのです。

東ロンドンの旅はいかがでしたか。今も、救世軍は世界中のあらゆる場所に――皆さんのいらつしやる所にも――救いをお届けしたいと願っています。創立者ウィリアム・ブースと同じ使命と視点をもって。

(救世軍士官 (伝道者))



弁護士事務所の建物の壁画

7月2日は、
救世軍創立149年の記念日です

〈信仰の体験談〉

主の山に備えあり



シアトルとレーニエ山の遠景



窪田勝利

ほかの家と違う家庭

私は、日本人の父とアメリカ人の母との間に長男として、香川県で生まれ育ちました。両親は共にクリスチャンで、父が救世軍に属する信徒であったため、物心つく前から救世軍高松小隊（教会にあたる）に通っていました。昔の記憶も、高松小隊で小隊長（牧師にあたる）の説教を母の隣で聞いているシーンだったり、今は亡き高齢の信徒の方が杖をつきながらゆつくりと会館を歩いているシーンだったりします。

私が生まれた頃は、まだ母も日本生活数年目で、自然、母からの声掛けは英語。父方の祖父母が私の子守りをする時もありましたが、結果として幼稚園に入るまで、私の話す言葉の八割方が英語だったそうです。無論、幼稚園に入ってから日本語と英語の割合が逆転しましたが。

幼稚園の時から、私は自分の家はほかとちよつと違うなあ、と思っていました。両親が国際結婚ということもありましたが、本格的に何か違うぞと思い始めたのは小学校に上がってからでした。けれども、そのことで悩んだり、困ったりした記憶はありません。クリスチャンホームに育った私は、何の抵抗もなく、自然に聖書の神様を信じるように

なっていたので、クリスチャンであることは至って当たり前のことでした。ですから、無宗教だったり仏教徒や神道信者だったりする「一般的な日本人」と自分は、家庭環境も含めていろいろな面で違うということ、かなり早い段階で理解していました。

何事も自然の成り行き

自分には日本とアメリカ両方の血が流れている、という自覚が常にありました。しかしそれは、決して、自分が何人なのか、どっちの人間なのかわからないという意味ではなく、自分は日本人であり且つアメリカ人でもある、というのが自分のアイデンティティでした。日本人だから柔道や茶道をたしなみ、アメリカ人だから色白で茶髪、クリスチャンだから教会へ行き、そして救世軍に属しているからラッパを吹く、といったような具合です。



1995年、家族と（前列左）

救世軍は、その創立時からブラスバンドが盛んで、礼拝や屋外での集会などで積極的にブラスバンドを用いてきました。ですから、ラッパを吹くようになったのは、当然の成り行きのようなものでした。初めてラッパ（＝ホルネット）を吹いたのは、青少年のためにおこなわれた集会の時でした。その後、同じ年の夏に開かれた音楽キャンプに参加し、普段も時々ホルネットを練習するようにになりました。この頃はまだ（ここにホルネットがあつて自分はそれが吹ける。なら吹かなきゃ損だ）というくらいの考えでした。

本格的に練習するようになったのは、中学校に上がって吹奏楽部に入部してからでした。入部の時、音階だけでなく簡単なメロディも吹けるということで、難なくトランペットパートに配属されて、とても嬉しかったことを覚えています。一般的に、トランペットパートは吹奏楽部でも非常に人気の高いパートで、今思えば競争率も高かったはずですが、そんなパートについたことも、神様のお導きだったのでしょうか。そのようにして始まった吹奏楽部が、私の中学校生活の大部分を占めるようになったのも必然的なことでした。

ただ、救世軍のブラスバン

ドは英国式で、トランペットではなくホルネットを用いるので、私は二年生の秋ごろから自分用のホルネットをもち、練習に励むようになりました。

アメリカへ

子ども時代に何度かアメリカへ旅行することがありましたが、本格的にアメリカへ行ってみたいと考え始めたのは高校の頃です。日本が父祖の国であるならアメリカは母国。何度か行ったことはあるけれど、実際に住んでみたいという理想解できないだろうと、一念発起して高校卒業後に渡米しました。

最初の一年は祖母と曾祖母の田舎の家で世話になり、シアトルにある救世軍の小隊に属して、ブラスバンドや唱歌隊（聖歌隊にあたる）に参加していました。その次の二年半は郊外の家で一人暮らしをしましたが、交通の便が悪く、寂しさが募るばかり。それに加えて、子どもの頃からの夢だったパイロットという目標も見失い、ただただ情性で毎日を過ごすようになりました。日本に帰るという手段もありましたが、英語もラッパも中途半端にしかできない、何のとりえもない自分が今帰ったところで何になるのか。せっかくなので何千里と越えて来たのだ、ここで諦めては

何にもならぬ、何か結果が出るまでは耐えてやろう、と、心の奥底で思っていました。ただ、そのような日々でも、日曜日の礼拝や毎週水曜のバンド練習を欠かすことはありませんでした。

転機

そんな中、シアトル小隊の青年が集まってシェアハウスを始めたことを知り、即座にそこに行こうと決意しました。二〇一一年が明けて少ししてから引越しました。

しかし、引越したのはものの、これから何をすべきだろうか、自分は何がしたいんだろうか、と自問する毎日。

《多少、環境は好転したけれど、目標もない生活がまた続くのだろうか……いや、そうなっていたまるか》と思っていた矢先、小隊プラスバンドの楽長から、救世軍連隊本部（その地区の小隊を管轄する所）の会計課で働いてみないか、との声がかかりました。楽長は、その財務部長をしていたのです。何でもいから



シアトル小隊バンド (中列左から 2 人目)



2011 年、冬

まず手に職をつけようと考えた時でもあり、二つ返事で了承。まずは産休を取る人の代わりに、非常勤として働くことになりました。

開始早々二日目に自転車転んで左手首を痛めるというハプニングもあった一週目でしたが、その週末にとんでもないニュースが日本から飛び込んできました。東日本大震災です。時差の関係で、発生のシアトルは三月十日の夜でした。インターネットのニュース放送を息を詰めて見ていました。

しばらくして、産休をとっていた人が子育てに専念することになったため、私は晴れて会計課の正規職員となりました。今まで

一度たりともやってみたいと思わなかった分野の職種でしたが、意外にも、自分に合っていました。妙に居心地が良いこの会計事務という仕事、せ

つかうだから長く続けてみようと考え始めたのは、怒涛の年度末会計監査と十二月の社会鍋シーズンを乗り越えた頃でした。

シェアハウスでも動きがあり、私が越えて来てから二年半の間に、ルームメイトたちが次々に就職などで巣立っていきました。二〇一三年の春に最後の一人が巣立ったことで、私もシェアハウスを後にして真正正銘の一人暮らしを始めました。

すべては備えられてきた

年一度の勤務評価では、過大評価とは思えない評価をいただくこと二年半、すっかり会計課に居ついた私に、将来的には会計士にならないか、との声がかかりました。ここに至ってはじめて、自分の進むべき道が示されたように思いました。他人に、それも常にお世話になっている人たちに認められたことで、私は自信を得ることができました。そのため、陰鬱だった頃の数年を余裕をもって振り返ることができました。その時、まず最初に思ったのは、

「主の山に備えあり」と、「耐えられない試練はない」という聖書の言葉でした。

「主の山に備えあり」とは、聖書の創世記に出てくる言葉です。神様に従って、山の上

で自分の息子をいけにえとして献げようとしたアブラハムに、神様が代わりのいけにえの雄羊を用意してくださったことからきています。必要なものは神様が備えていてくださる、ということ。また、「主の山に備えあり」と表現します。

「耐えられない試練はない」とは、

「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはず。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるように、逃れる道をも備えていてくださいます」(コリントの信徒への手紙一 10 章 13 節)

からきています。



職場のデスク

子どもの頃から教会に通い、聖書を読み、これらの御言葉を聞き知ってはいても、真つ暗闇を手探りで山を登り、谷を越えているような只中にあつては、なかなか実感できないものです。それをこうして振り返って山や谷を見返して、心底驚きました。あれほど苦しかったのに、この程度の山や谷だったのか！ 乗り越えられないと思っていたのは自分の思い込

みだったのか！ 正に天啓をいただいたとも言える瞬間でした。

そして、これから

前を見れば、まだまだ前途多難な毎日。一人暮らしの寂しきや会計士になるための勉強に対する不安が完全に消え去ったわけではありません。しかし、苦しい時期を乗り越えられたという自信と、神様が共にいてくださるという確信を得た今では、また違った心意気で挑むことができます。

とりあえずはやって見ようと始めたコルネットも、ふと気づけばそれのお陰でシアトル小隊のプラスバンドに属し、自分の居場所を得ることができました。二年前に編成の関

いのほか自分の性に合っていたなどと、予想だにしませんでした。

今まで幾度も「将来的に日本に帰るのか」「アメリカに永住するのか」という質問を様々な人から受け、その度に「さあ、どうだろうなあ、まだわからないや」と曖昧な返事をしていました。はつきりした目標を得た今でも、

「さあ、どうだろうなあ、まだわからないや」と同じ返事をします。でも、何をしたいのか自分でもわからなかった以前とは違い、今では敢えて自由な選択ができる、という意味で、どっちつかずの返事をするようになりました。つまり、良い意味での「天任せ」です。

大して信仰熱心なわけでもなく、情性で教会に通っていた時期もある私ですが、そんな私ですら神様は導いてくださった。ならばその導きに最後まで従うまでです。

「主の山に備えあり」

なので、すから！

アメリカシアトル小隊(教会)所属

の近頃の救世軍を紹介してください。

クリスト教についてもっと知りたいです。

「ときのかえ」の購読を申し込みます。

氏名

ご住所

WINDOWS
on the
ARMY
WORLD

世界をみつめて

〈クウェート〉救世軍の大将が初めて訪問

5月8日から11日、救世軍の全世界の指導者アンドレ・コックス大将が、歴史上初めてクウェートを訪問しました。救世軍は、2008年夏にクウェートでの働きを開始し、2010年4月に、他の湾岸諸国からなる、救世軍の中東地区の活動が正式に組織されました。クウェートにある女性のための宿泊施設「ブース・ハウス」では、2009年の開設以来、人身売買の犠牲者となっている女性を千人以上保護し、安全に生活できるまで支援しています。

今回の大将の訪問は、様々な困難の中にある、中東のキリスト教関係者にとっても特筆すべき出来事となりました。大将は公開集会で、神の真実さを語り、多くの人が新たな決断の祈りを献げました。

大将夫妻は、大使館員や、教会の指導者、法律家、また、救世軍の社会福祉事業への協力者など約50人と昼食を共にしました。また、日曜日には、セイフ宮殿に招かれ、ナワフ皇太子と会談。終始なごやかな中で会話は進み、大将はクウェートにおいて信仰の自由が与えられている感謝と共に、クウェートの人々のために、救世軍は助力を惜しまないことを伝えました。皇太子も救世軍への協力を申し出てくださいました。この会談の様子はクウェートのテレビや新聞でも報じられました。



イスラムのスカーフを着ける大将 (後列中央)

〈オーストラリア〉

レッド・シールド募金運動

5月24、25日、オーストラリア全土で展開されるレッド・シールド募金の出発集会在メルボルンで開催されました。「レッド・シールド」とは、救世軍の社会奉仕や、緊急災害支援の働きを表すシンボルです。シールド(盾)によって神様のお守りがあるように、との祈りが込められています。



レッド・シールドのマスコット

この集会には、540人以上の企業、政府、民間のリーダーが参加。オーストラリアにある千以上に及ぶ救世軍の社会福祉の働きのために、8千万オーストラリアドル(日本円で約75億円)の目標額が掲げられました。

集会では、救世軍を通して新しい人生へと転換できることが強調され、20歳の青年が紹介されました。彼は、9歳の時、メルボルンの街角で寝ていました。当時、両親を失い、アルコールと薬物の乱用、街頭生活の中にありましたが、救世軍に出会い、その支援によって、住居を得、立ち直ることができました。

募金運動のテレビコマーシャルも放映され、トミー・アボット首相は、早速25万オーストラリアドルの献金を発表。レッド・シールド募金は、救世軍の施設やプログラムを通して、ただちに地域に還元されています。



レッド・シールド募金には多くの市民もボランティアで参加している

2014年 克己週間募金 結果報告

この度の克己週間募金(3/1~4/30)へのご協力、ありがとうございました。心からの感謝とともに、下のとおり結果をご報告申し上げます。

(単位:円)

北海道地区	766,100
関東東北地区	1,764,500
東京東海地区	8,112,650
西日本地区	2,758,210
医療部	672,326
社会福祉部	2,004,865
士官学校	1,455,000
本営(本部)	160,498
全国合計	17,694,149

(2014年6月10日 現在)

七月二日は、ウィリアム・ブースが、東ロンドンの墓地に張られたテントで初めて伝道集会をした日です。救世軍は、この日を創立記念日としました。



一人ひとりに声をかけて食事を提供

来年は、創立百五十年の記念すべき年。ロンドンにおいて、救世軍の万国大会

を伝えていきます。

現在、四十五の小隊教会に(あたると)十二の分隊伝道所にあたる、二十の社会福祉施設、一つの病院ホスピス併設を通して働きを進めるとともに、街頭生活者支援や災害被災者支援など、様々な社会奉仕活動をおこなっています。



師だったウィリアム・ブース

プロテスタントのキリスト教会で、世界百二十六の国と地域で活動しています。創立者はイギリスのメソジスト教会牧師

が主催されます。ロンドンの中心街では、救世軍が活動する国々からの参加者による数千人の行進もおこなわれる予定です。

日本での働きは、一八九五(明治28年)に始まりました。その当初から、刑を終えて出てきた人々の保護や職業訓練、災害被災者支援、廃娯運動の推進、結核療養所の設立、子どもの保護など、社会福祉史に先駆者としてその足跡を残しました。

救世軍とは

The Salvation Army

(取扱支部)

救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

発行日及び定価

発行日 毎月一日・十五日
定価 毎月 五〇円(六六円)

一日号 一部五〇円(六六円)
十五日号 一部六〇円(七六円)
クリスマス特集号 十二月一日号
一部一〇〇円(七六円)

一年分 二七〇円(送料七五円)
振替 〇〇一八〇五五四〇〇

編集人 救世軍 代表者 勝地 次郎
印刷所 救世軍 代表者 齋藤 恵子

電話 東京(03)二三三三〇八八一
救世軍本営 図書印刷株式会社

印刷所 救世軍本営 図書印刷株式会社